

〔第27回学術集会 シンポジウム1〕

子どものいる家族への支援における新たな協働の可能性

聖路加国際大学大学院

小林 京子

COVID-19で子どもがいる家族の脆弱性が顕著になった。子どもとユニットである家族は、保育園の休業・学校の休校などの子どもの生活の変化を受け、経済活動を含む家族の生活全般の調整を余儀なくされた。ここでは子どもがいる家族への2つの協働支援を紹介する。

一つ目は入院療養中の子どものきょうだいへのリモート会議システムによる遊びの提供である。学校・保育園への登校・登園ができず、親は入院中の病児への付き添いや仕事でひとりぼっちで家庭で過ごすきょうだいへ病院—大学が協働で行った支援であった。

もう一つは、「保育園での感染予防アクションリスト作成」であった。高齢者施設のアクションリス

トの姉妹版で、保育園が安全に安定的な保育を提供するための支援で、親の就労と家族生活を支援することにつながる。看護チームによる作成の後、実用可能性と活用において看護師と保育士が協働する。

COVID-19により全ての人々の生活に医療が入り込み、多様な協働の新たな可能性が生じている。今回紹介した協働では、開始の契機は異なるが、支援の対象者のニーズへの合致、目標の共有、協働する専門職の役割理解と信頼関係、情報共有が成功の鍵であった。COVID-19により求められる協働は、医療の枠組みに留まらない、支援対象者の生活の視点、すなわち支援対象者を中心に据えた支援をすることが重要である。

「高齢者ケアのために新型コロナウイルス対応情報を発信する会」の活動経験から考えるポストコロナ時代における家族看護学

慶應義塾大学看護医療学部

深堀 浩樹

本シンポジウムにて、私たちが、2020年4月より行ってきた「高齢者ケアのために新型コロナウイルス対応情報を発信する会」の活動を紹介した。以下、当日の発表に基づき簡単に活動内容を示す。この活動は大学教員、大学院生、臨床看護師、イラストレーターなど30名程度で行ったもので、主に①：国内外の学術団体等の資料の収集・翻訳と翻訳資料を活用したCOVID-19対策のためのアクションリストの開発、②：①を活用した臨床家向けの相談窓口の開設、の2つを行ってきた。アクションリストは、高齢者施設等で推奨される事項を「施設へのウイルスの侵入を予防する」などの7つにまとめたものである。この活動は、高齢者施設等での活用事例の報告やマスメディアでの紹介など一定の反響を呼び、

日本老年看護学会が厚生労働省より介護職員等への感染予防に関する研修プログラムを作成する事業を受託するきっかけにもなった。相談窓口は、ウェブサイトにて匿名で質問を受け付け看護管理や感染看護の専門家が回答するもので、入浴介助時のマスクの着用の必要性など現場で生じる様々な状況における適切な感染予防に関する質問が多く寄せられた。

当日の質疑応答では、メンバーの使命感や多様な専門性がこの活動の推進につながったことが再確認でき、発展・普及のための方策についても議論できた。また、コロナ禍において家族看護学が研究・教育・実践を通して社会貢献していく必要性を改めて感じる機会ともなった。